

## 第 64 回加藤周一文庫公開講読会 『続羊の歌』を読む

2026 年 1 月 17 日

担当者：佐々木梓（立命館大学博士課程後期課程）

### 「外からみた日本」（前半）

#### 【本章の概要】

三年間のフランス留学から日本に帰ってきた加藤は、留学以前と以後では全く異なる日本への見方を自らが体得したことを自覚する。本章の前半では、そうした見方の変化が、フランスから日本に至るまでの船旅における体験、さらには帰国後の神戸や京都といった街並みへの眼差しを通して描かれていく。後半は、東京に戻り、日本での生活に戻っていく加藤の実生活が描かれる。とある鉱山会社の日本橋本店の医務室で働くことになった加藤は、九州の炭坑も見物にいく。国内の複数の土地に視点が移りながら、時折フランスの事象の想起も折り重なりつつ、日本社会や文化に対する批評がなされていく。

#### 第一段落

三年間私は日本の土を踏まなかった。関門海峡を通る船の甲板から、北九州の海岸を望んだとき、はじめて、そしておそらく最後に、私は日本を外からみた。この国が私の眼にどう映るか、そのときの私には好奇心があった。その好奇心は、北九州の海岸のみえた瞬間に、確信に変ったが、確信の内容は、容易に分析し難いものであった(私はその後度々日本を離れるようになった。しかしまた度々日本へ帰るようになり、日本の内・外の区別は、もはや私にとって決定的な意味をもたなくなった)。

「三年間私は日本の土を踏まなかった」

→1951 年 10 月から 3 年間のフランス留学を示す。

「関門海峡を通る船の甲板から、北九州の海岸を望んだとき、はじめて、そしておそらく最後に、私は日本を外からみた。」



図① 関門海峡の写真(出典:『写真で見る日本 11』日本文化出版社、1957年4月)

▶以降、日本の内と外の区別それ自体を重視しなくなったという、見方の推移が、傍線部「そしておそらく最後に、私は日本を外からみた」の一節に表されている。

○《関門海峡》

北九州市門司区と山口県下関市の間にある海峡。海上保安庁では門司区田野浦の部崎から下関市満珠島を結ぶ海域を東端とし、若松区響町から小倉北区馬島を経て下関市六連島を結ぶ海域を西端とする長さ約二七キロの海峡部を広義の関門海峡としている。古来より潮流や強風により遭難の多発する難所で、大正期には一日のうち潮と風の好ましい三時間に、若松港（現若松区）より中国・近畿方面に向かう機帆船（石炭運搬船）約四〇〇隻が通過したとされる。昭和三三年国道トンネル、同四八年早鞆の瀬戸に関門橋（全長一〇六八メートル）が架設された。同四九年山陽新幹線関門トンネルも開通。このため北九州市と下関市を結ぶ唐戸航路は衰退、門司港の役割は低下した。現在門司港周辺は大正から昭和初期の建築を再現するなど、門司港レトロ地区として観光を目的とした再開発が行われている。（参照：『日本歴史地名大系』）

・第一段落―本章冒頭は、加藤の乗った船が関門海峡を通る時点から始まる。次の第二段落からは、その船が冒頭の地点に至るまでの航路、ならびに加藤の見た数々の風景の描写が始まることから、本章は大きく回想構造を取っている。導入として先に関門海峡の地点における心境を示す―こうした構造により、本章は加藤がどのように日本への眼差しの変化を自覚するに至ったのか、まさに航路のようにその経緯を辿っている。

第二段落（前半）

貨物船はマルセイユを出てから関門海峡に到るまでにおよそ六週間以上を要した。それはヨーロッパ的なもの、その言葉や建築様式や風俗習慣の次第に遠ざかってゆく過程であり、別のもう一つの世界、おそらく「アジア」という言葉でよぶほかにない自然のおよび文化的多様性が、次第に強く鮮かにあらわれて来る過程でもある。カイロではまだ英仏語が通じ、街の看板も、いや、新聞さえも、その二カ国語で読むことができた。空気は乾いていて、地中海は、南仏でも北アフリカでも、同じ群青に輝いていた。船がインド洋を横切り、マラッカ海峡に入ると、そのすべてが変りはじめる。空気は湿気を帯び、海の色さえも変わってみえた。岸には熱帯の密林が波打際まで生い茂っている。船が港で荷の積みおろしをしている間に、私は上陸し、密林や華僑の街や「原住民」の部落をみた。シンガポールの埠頭と起重機と大廈高樓。それは西洋の港と少しもちがわない光景であったが、そこだけが周囲からはっきりと区別され、土地の気候や人間とは全く無関係に生きていた。英語はもはや単なる商売の道具にしかすぎない。

「貨物船はマルセイユを出てから関門海峡に到るまでにおよそ六週間以上を要した。それはヨーロッパ的なもの、その言葉や建築様式や風俗習慣の次第に遠ざかってゆく過程であり、…」

→ヨーロッパとの、単純な物理的距離の開きだけでなく、言語や習慣といった文化そのものと離れていく過程がグラデーションのように記述されていく。

### ○《加藤の乗った貨物船》

→鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか—『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018年10月）によると、加藤の乗った船は、大阪商船の「あとらす丸」であるという。

写真の出典：国土交通省海事局 監修『船の科学』船舶技術協会、1951年10月）



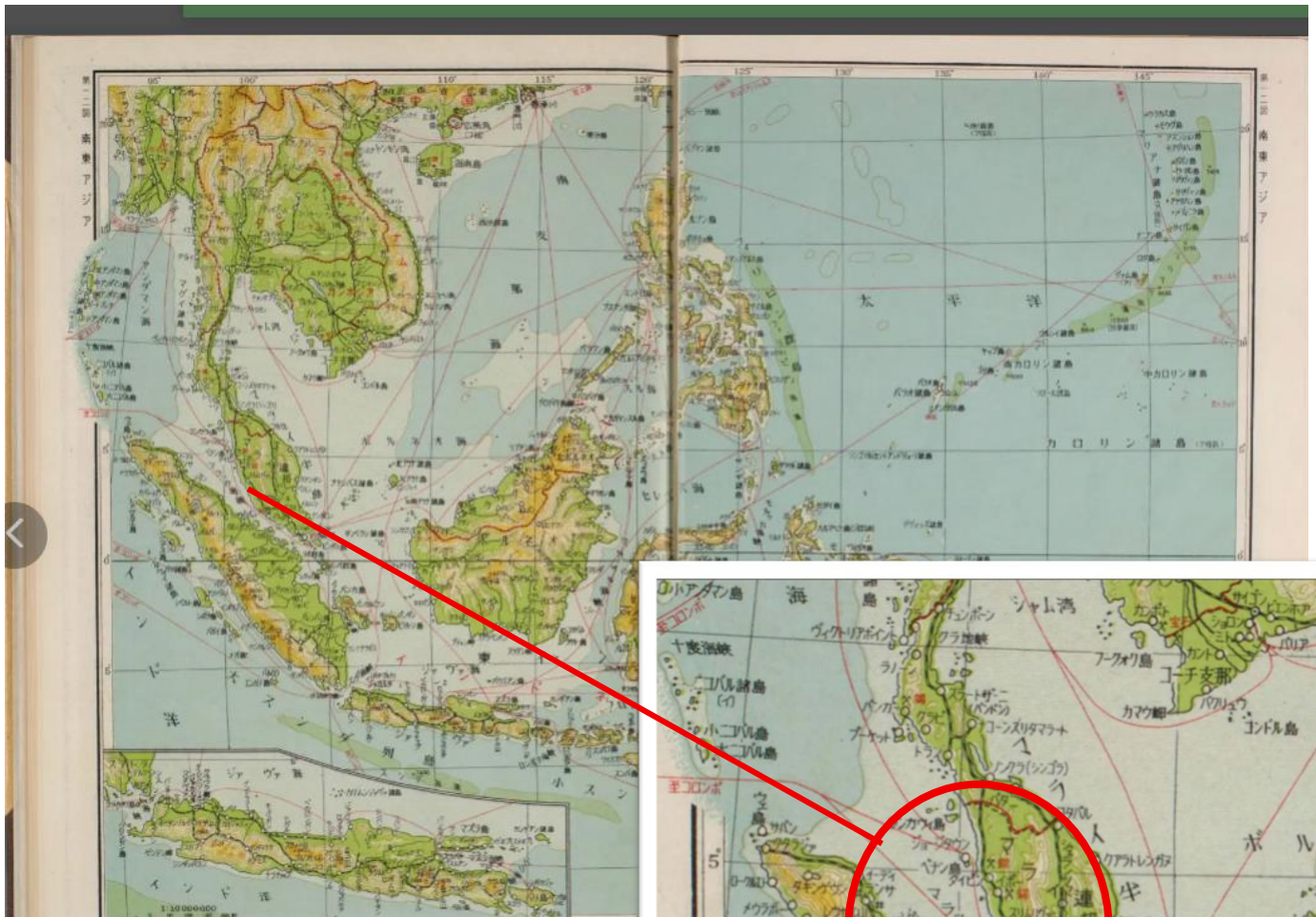
「空気は乾いていて、地中海は、南仏でも北アフリカでも、同じ群青に輝いていた。船がインド洋を横切り、マラッカ海峡に入ると、そのすべてが変りはじめる。空気は湿気を運び、海の色さえも変わっていった。」

→マラッカ海峡を境に、空気も海も含めた、環境そのものがガラリと変化していく様子が描かれる。

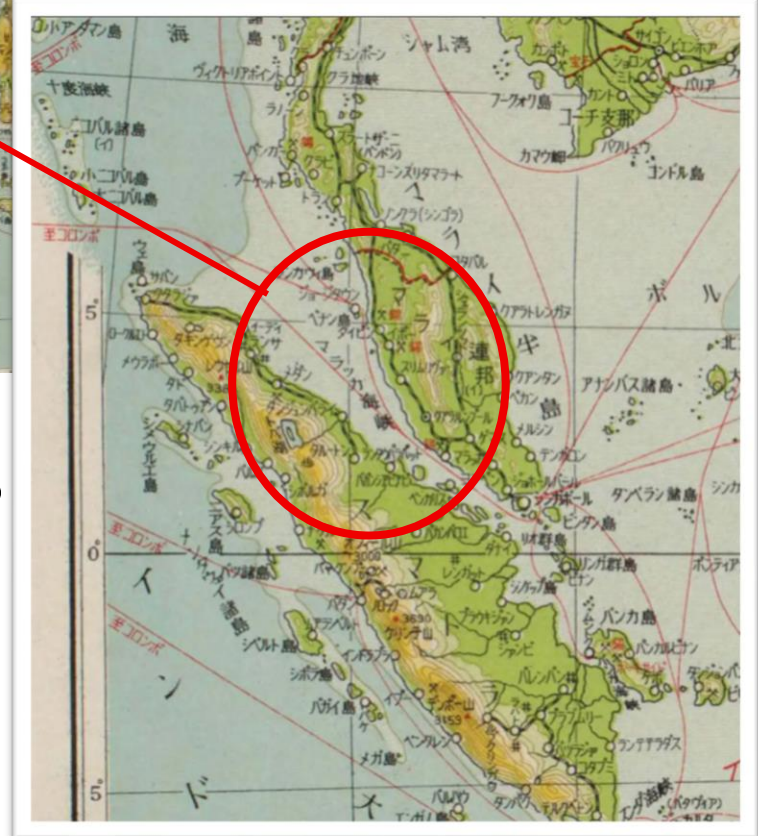
### ○《マラッカ海峡》

マレー半島とスマトラ島との間にあり、南シナ海とインド洋のアンダマン海とを結ぶ海峡。  
西から東南アジア、東アジアに行く船はこの海峡を通る必要があった。





出典：日本地図学会編『世界地図帖』（1953年8月）



「私は上陸し、密林や華僑の街や「原住民」の部落をみた。シンガポールの埠頭と起重機と大廈高樓。それは西洋の港と少しもちがわぬ光景であつたが、そこだけが周囲からはっきりと区別され、土地の氣候や人間とは全く無關係に生きていた。」

→先の記述にて描かれていた氣候の性質と、ここに登場する「西洋の港と類似するシンガポールの風景」との間にある隔絶に言及される。こうした、土地や氣候の性質と隔絶した風景を見たことも、後続の段落で示される加藤の文化観に影響を与えているか。

### ○《華僑》

【引用資料：大岩泰『変貌するマレー：シンガポール・マラヤの産業と貿易』日本貿易振興会、1959年12月】

華僑の人口は現在マレー連邦に二三〇万、シンガポールに約一〇〇万、計三三〇万人と推定されている。一九世紀当時においては奴隷として送られてきたものも少くはなかったが、一九二〇年以降、支那からの移民は急激に増加しており、一世紀を経た現在マレーの華僑もすっかりマレーに定着している感が深い。

（中略）華僑社会が出身国によって、職業的にも、制約されているのは他の地域と変わらない。その職業分野は入り組んできてはいるが、依然として強い底流をなしている。

### ○《埠頭》

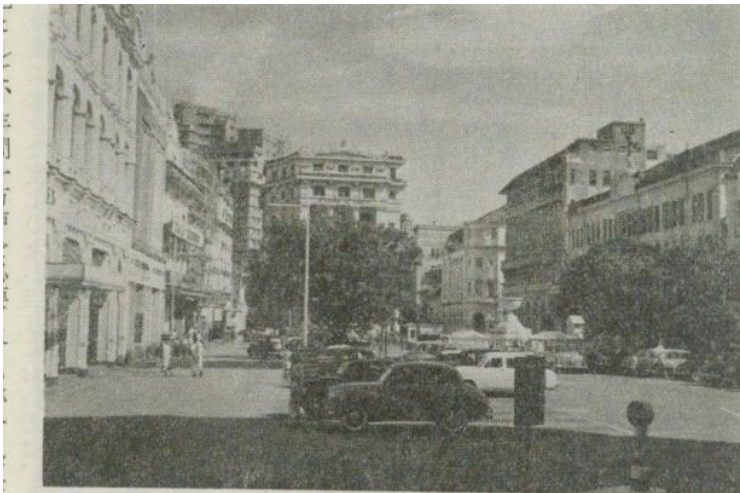
・港湾内で船を横づけにして、旅客の乗降や貨物の積み下ろしをする場所。陸岸から突き出した突堤埠頭と陸岸に平行に作られた平行埠頭がある。波止場。埠頭場。（引用：『日本国語大辞典』）

### ○《起重機》

・人の力では動かすことのできない重量物をあげおろしするための機械で、重い物を垂直や水平の方向に、持ち上げたり移動させたりするもの。クレーン。（引用：『日本国語大辞典』）

### ○《シンガポールのビルディング》

【写真の出典：大岩泰『変貌するマレー：シンガポール・マラヤの産業と貿易』日本貿易振興会、1959年12月】



Raffles Place（東京で云へば『日本橋』に相当する。）  
シンガポールの起点であり、商業の中心地である。  
左側は JETRO office のあるビルディングである。

## 第二段落（後半）

香港まで来ると、無数のシナ人たちが港で荷の積みおろしに働き、街の本屋で本土から輸入したシナ語の本をたち読みしていた。マニラでは当局が、日本の貨物船を入港させたが、日本人の乗客に上陸の許可をあたえなかった。釜山では当局が日本人の上陸を許さなかったばかりでなく、沖仲仕が罷業をしていて、船は港に入ったまま一週間も動くことができなかった。「一日待たされれば、一〇〇万円見当の損ですよ」と船長は歎いた。「反日の厭がらせということでしょうか」「いや、仕事の捗らぬのは、米国船の荷揚げでも同じことでしょう」。その米国船が荷物を満載して港に入り、赤い船腹を水面にさらしながら、出てゆくのがみえた。ここまで来ると、もはやヨーロッパの影もない。その代りに米国——というよりも米軍そのものが、ジープや売春婦や横流しの煙草と共に、君臨していた。「ごらんなさい、街の半分が暗いでしょう」と船長はいった、「交代で半分ずつ電気を送っているのです。埠頭に横づけした米国船の発電機から……」。

### ○《沖仲仕》

・「船内荷役作業に従事する港湾労働者。今日では接岸荷役が主流を占め、また荷役機械の導入が進展して船内荷役労働の内容が変化したこともあり、沖仲仕という名称は使われず、船内労働者あるいは船内荷役作業員という呼称が定着している。港湾が本格的に整備される 1965 年（昭和 40）ごろまでは、船舶が入港しても接岸できる施設が少なく、そのため大部分の船舶は沖に停泊し、貨物は舁に積み替えて陸との間を運送されていた。こうした沖の本船や舁の中で貨物の揚げ降しの作業に従事するため、沖仲仕といわれた。」（引用：土居靖範「沖仲仕」『日本大百科全書』）

### ○《罷業》

・「業務をやめること。仕事を休むこと。」（引用：『日本国語大辞典』）

「その代りに米国——というよりも米軍そのものが、ジープや売春婦や横流しの煙草と共に、君臨していた。「ごらんなさい、街の半分が暗いでしょう」と船長はいった、「交代で半分ずつ電気を送っているのです。埠頭に横づけした米国船の発電機から……」。

→

### 《当時の韓国の電力に関して》

【参考資料：韓弘建『解放から今日までの韓国の全貌』（立花書房、1953 年 7 月）】

解放後においても南北の分裂がなかったならば韓国が電力不足で困ることはなかったはずである。水力発電所は全部三八度線以北にあつて、以南にはわずかな発電力をもつ清平、宝城江の二水力発電所と、そのほかは火力発電所が二、三あつたきりである。だから南北分立後の韓国は電力においても非常に不利な状態におかれてしまったのである。すなわち南韓各地の発電所が発電する電力で需要の四分の一もまかないえない状態にあつたといえる。（中略）現在は寧越火力発電所（動乱で破壊）は修復課程にあるので、唐人里火力発電所、釜山、光州の火力発電所、清平と宝城江水力発電所が発電しており、米国から貸与された発電艦二隻が発電している。

→電気の事情を描くことは、同時に当時の釜山、ひいては韓国の状況に向けて読者の想像力を働かせる意



味も有していると考えられる。

### 第三段落

冬の南シナ海は荒れ、玄海灘の波は高かった。しかし関門海峡は凪ぎ、遠い海面にほの白く朝もやがたゆたっていた。北九州の岸は、その朝もやの裂けめに、薄墨を刷いたようにあらわれ、やがてその岸に、工場の煙がたち昇り、石油貯蔵の設備が朝陽を浴びて銀色に輝くのがみえた。船が小さな島の傍を通ると、曲りくねった松や、瓦屋根の人家もみえる。それが三年間私の見なかった日本であった。油絵の色と幾何学的遠近法の代りに、水墨画の濃淡ともやの遠近法の世界。たしかに、和辻哲郎も同じ景色を見たにちがいない。しかし和辻はそこからまちがった結論「風土」を抽きだした。もやのたちこめる海と山がなければ、水墨画はなかったかもしれない。しかし決して和辻のいったように「風土」とそのもやが水墨画を生み出したのではない。この列島に何世紀も住んでいた人々、彼らが長い歴史を通じて次第につくりあげた秩序の体系のことを私は考えていた。瓦屋根の人家の形、水墨画の濃淡と線の調和、微妙で複雑な生活の様式の全体とその内的整合性……それが何であるにしても、日本はまず、自然的環境としてではなく、そこに住みついた人間の歴史として、砂漠や密林や岩山ではなく、まさに何よりも社会的な実体として、私のまえにあらわれた。そういうものとして、私は日本という風景をみた——おそらく二度と揺がぬだろう日本の姿を見とどけたと思った。(私はそこから出発して、その後いくつかの文章を書いた)。

「冬の南シナ海は荒れ、玄海灘の波は高かった。しかし関門海峡は凪ぎ、遠い海面にほの白く朝靄がたゆたっていた。」

### ○《南シナ海》

→「東シナ海」の誤記か。

### ○《玄海灘》

・「九州北西部の海域で玄海と略称される。西は対馬海峡東水道、壱岐水道で東シナ海に続き、東は鐘ノ岬、地島の線で響灘に至る。福岡県から佐賀県にわたり、東から筑前大島、相島、玄界島、小呂島、烏帽子島、神集島、小川島、加部島などの島々や多数の岩礁があり、福岡（博多）、唐津の両湾が開けている。水深は100メートル内外であるが、大部分は50～60メートル未満の浅い大陸棚が中心で、対馬海流が南西から北東に流れる好漁場であるが、冬季は季節風により海が荒れるため、小型船の遭難が多い。」（引用：石黒正紀「玄界灘」『日本大百科全書』）

国土地理院「地理院地図」

(<https://maps.gsi.go.jp/index.html#7/33.988918/130.127563/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1glj0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>)





その内的整合性……それが何であるにしても、日本はまず、自然的環境としてではなく、そこに住みつuita人間の歴史として、沙漠や密林や岩山ではなく、まさに何よりも社会的な実体として、私のまゝにあらわれた。」

→留学後の加藤の眼に入ったのは、気候や土地が織りなす〈日本〉ではなく、そこに住む人間が織りなしてきた歴史や文化それ自体であった。気候や土地という〈ところ〉が文化を構築する、という和辻の論理に対し、加藤は、人間が作り上げた秩序や体系、文化を、もちろん自然環境と無関係とはしていないものの、いわば独立した一世界として見做していると類推する。

「そういうものとして、私は日本という風景をみた——おそらく二度と揺がぬだろう日本の姿を見とどけたと思った。(私はそこから出発して、その後いくつかの文章を書いた)。」

【加藤の他の言説】加藤周一「日本文化の雑種性」(初出：『思想』岩波書店、1955年6月号、引用：『加藤周一著作集 7 近代日本の文明史的位置』平凡社、1987年8月)

日本の第一印象とでもいうべきものはこうであった。海に迫る山と水際の松林、松林のかげにみえる漁村の白壁、墨絵の山水がよく伝えているあの古く美しい日本、これはヨーロッパとは全くちがう世界であるということが一つ、しかし他方では玄界灘から船が関門海峡に入ると右舷にあらわれる北九州の工場地帯、林立する煙突の煙と溶鉱炉の火、活動的で勤勉な国民がつくりあげたいわゆる「近代的」な日本、これはマレーとは全くちがう世界であるということがもう一つ。神戸に上陸したときの印象も全く同じものである。神戸はマルセユともちがうが、シンガポールともちがっていた。外見からいえばシンガポールの方が神戸よりもマルセユともちがうが、シンガポールともちがっていた。外見からいえばシンガポールの方が神戸よりもマルセユにちがいが、それはシンガポールが植民地だからであって、シンガポールの西洋式の街はマレー人が自分たちの必要のために自分たちの手でつくったものではない。そういう植民地にとっての問題は、原則としては、はっきりしている。植民地か独立国か、外国からの輸入品か国産品か。もしそういうところで文化が問題になるとすれば純粋に国民主義的な方向でしか問題になりえないだろう。ところが神戸では話がそう簡単にゆかない。港の栈橋も、起重機も、街の西洋式建物も風俗も、すべて日本人が自分たちの必要をみたすためにみづからの手でつくったものである。シンガポールの西洋式文物は西洋人のために万事マルセユと同じ寸法でできているが、神戸では日本人の寸法にあわせてある。西洋文明がそういう仕方であジアに根をおろしているところは、おそらく日本以外にはないだろうと思われる。マレーともちがうし、インドとも中国ともちがう。そのちがいは、外国から日本へかえってきたとき、西ヨーロッパと日本とのちがいよりもはるかに強く私の心をうごかした。西ヨーロッパで暮していたときには西ヨーロッパと日本とを比較し、日本的なものの内容を伝統的な古い日本を中心として考える傾きがあった。ところが日本へかえってきてみて、日本的なものは他のアジアの諸国とのちがい、つまり日本の西洋化が深いところへ入っているという事実そのものにもとめなければならないと考えるようになった。ということは伝統的な日本から西洋化した日本へ注意が移ってきたということでは決してない。そうではなくて日本の文化の特徴は、その二つの要素が深いところで絡んでいて、どちらも抜き難いということそのこと自体にあるのではないかと考えはじめたということである。

→こうした日本への眼差しは、次の第四段落においても、帰国直後の所感としてより即時性を有したものと

して描かれていく。

#### 第四段落

六週間の航海は、「アジアのなかの日本」をはっきりさせるためには、充分であった。北九州の海岸や神戸の港に似た風景は、アジアのどこにもない。外国人が外国人のためにつくった設備ではなく、その土地の人間がみずからの用に供するためにつくった「近代的」設備は、工場にしても、起重機にしても、病院にしても、マルセイユ以後日本においてはじめてあらわれる。その意味で、神戸はマルセイユに酷似し、シンガポールや香港に全く似ていない。だから表面的には、シンガポール・香港の方が、夜の街の灯を船の甲板から眺めたときに、神戸よりもはるかにマルセイユに似ているのであろう。「アジア」という漠然とした概念は再検討しなければならない。そういう考えは、神戸に上陸して、税関の手続をしている間も、絶えず私の脳裡に去来してやまなかった。

→先の引用を補助線にしながらこの箇所を読むと、外国の技術や建築様式、風俗といったものを、その土地の人間がその土地のために取り入れ再構築しているという特徴を見出すことで、「アジアのなかの日本」を相対化しているといえる。神戸の街並みからこうした眼差しを構築しつつ、舞台は京都に移っていく。

#### 第五段落前半

しかし私は荷物を神戸に残したままその足ですぐに京都へ出かけた。子供が病気で、神戸まで迎えるに行くことができなかったのだと私を待っていた女はいった。私は何のために帰ってきたのかを説明して、そのまま別れる他ないのだとくり返し、彼女はなかなかそれを信じようとしなかった。「そんなことってあるかしら。こんなに待っていたのに」。そのとき私は同じことをくり返す私自身を憎んでいた。私は自分がひとりの人間の生活を精神的に破壊しようとしていることを感じた。「あなたは馬鹿ね、また同じことになるでしょうに……」そうにちがいはなかったろうが、将来「また同じことになる」かならぬかは、私にとって全く問題ではなかった。

「しかし私は荷物を神戸に残したままその足ですぐに京都へ出かけた。」

→実際の移動先は東京。移動先は虚構な一方で、「彼女」とは綾子氏を指し、ここでは抽象的な概念としての女性ではなく、具体的人物を示す。

【参考資料：鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか—『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018年10月】

加藤の年次手帳の記録を事実とすれば、加藤は神戸からすぐに東京へ戻ったと思われる。三月四日に上陸し、三月九日には「Professor Suzuki」（おそらく鈴木信太郎）に角川書店で会う予定が書かれている。では、なぜ神戸上陸後すぐに「京都で古い寺や庭を見て廻った」と記したのか。実は三月三〇日から四月三日まで加藤は京都に滞在している。留学を経た加藤の眼は留学前とは変わっていて、京都の町のみならず、古い寺や庭が留学前とは違って見えるかどうか確かめたかった。しかも、そのことを帰国直後のこととして記したかったのだ。

「私は何のために帰ってきたのかを説明して、そのまま別れる他ないのだとくり返し、彼女はなかなか

それを信じようとしなかった。」

→「彼女」に説明した帰国の理由とは、前章で記述された「遠い京都で私を待っているはずの人間を、いつまでも待たせておくのは、公正でないということまで考えはじめていた。手紙で心变りを報らせるというのも、相手を尊敬しないやり方であろう。会って説明した上で別れなければならない。そのためにはどうしても日本に帰らなければならない…」という事情であろう。「彼女」が受け入れがたいのも当然であり、「私」は自己を憎み、その感情は後続の自己問答の描写に繋がって行く。同じことを繰り返す自己を自覚しつつ、「私」は「将来「また同じことになる」かならぬかは、私にとって全く問題ではなかった」と今現在の決心を重視する。

#### 第五段落後半

「不満な点があるのなら、いってくれ」と彼女はいった。そういうことではない。私はながく彼女を愛していると思っていたが、ひとりの女にほんとうに夢中になったときに、彼女と私との間の関係がそれとはちがうものであったということに気がついたのである。「不満な点などは一つもない、欠点があったとすれば、それはたしかに私の側にありすぎるほどあっただけだ」と私はいい、事実そう思っていた。相手に責任のない不幸を、私が相手の生活のなかにつくり出す、ということを承知の上で、私が行動する——行動せざるをえない、というときに、その当の相手と話すことのあるはずがない。私は喋り、喋ることの無意味さを感じ、疲れ切った。私は放心状態で彼女に別れ、二度と会うまいと考えた。もはや相手のことを考えつづける気力もなかった。それは完全に自己中心的な状態である。しかしそういう状態が成立すると同時に、私はそういう自分自身を第三者のように眺めてもいた。この「自己」とは何だろうか。ひとりの女から去って、別のもうひとりの女へ向う人間の内容は何であろうか。その二人の女との関係を除けば、私のなかには何も残らず、ただ空虚だけが拡まっているように思われた。

→別れの原因が自分自身にあるのだとしたら、その原因を話してほしいと述べる「彼女」に対し、「私」は別れの原因や責任はすべて「私」自身にあると伝える。「彼女」に対し、不幸を生じさせてしまうことを承知のうえで、それでも別れを選択せざるをえないとき、「私」は当の相手と話すことはないと考える。そこで相手との対話を中断してしまうことを、「私」自身も「自己中心的な状態」と自覚する。ここで、「私」の心理を「私」自身が批判するという、いわば批評的な眼差しが生まれている。この時点で、加藤は明確に〈自己〉と対峙し始める。相手の心理よりも、自身の行動を選択せざるを得ず、さらに相手に対し自身の心中を「喋る」——伝達することの無意味さを感じるがゆえに、伝達の基盤となる〈自己〉それ自体の揺らぎを意識しているといえる。

→このようにして「私」の意識は〈自己〉それ自体に向かっていき、揺らいだそれを再度見出す契機として、虚構の京都体験が描かれていくといえる。

#### 第六段落前半

私はそのときすぐに東京へは帰らなかった。しばらく京都で古い寺や庭をみて廻った。東京で医者の仕事をはじめれば、多忙にまぎれて、我を忘れるだろう。しかし我を忘れることではなく、我を再び見出すこと、そのために、しばらく自分自身とだけつき合うことが、どうしても必要だと思われた。誰かと話したいという気もしたが、話すことのあるはずもなかった。私はひとりで夕方の盛り場を歩いた。身の廻りに日本人しかいないということ、みんな黒い髪をしていて、どこへ行くのか、絶え間なく流れるように



舗道を歩いて来ると言うことが、異様な、不思議な光景であるかのように、感じられた。身なりは、三年まえよりも、はるかによくなり、若い人たちが多くて、健康そうな明るい顔をしていた。この人たちは朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさとどう係りあって来たのだろうか、と私は考え、釜山とパリを思い出した。彼らがいくさに反応し、または反応しなかった日本は、私の知らない日本であった。しかし古い京都は、いつもそこにあった。

「私はそのときすぐに東京へは帰らなかった。しばらく京都で古い寺や庭をみて廻った。」

→単純に「寺や庭」と対象が示されるのではなく、ここで「古い」と形容がなされているのに留意したい。

「しかし我を忘れることなく、我を再び見出すこと、そのために、しばらく自分自身とだけつき合うことが、どうしても必要だと思われた」

→忘我ではなく、空虚な自己の像を再び結ぶことを目的にした、いわば内省の舞台として京都が選ばれる。

「身の廻りに日本人しかいないということ、みんな黒い髪をしていて、どこへ行くのか、絶え間なく流れるように舗道を歩いて来ると言うことが、異様な、不思議な光景であるかのように、感じられた」

→3年の留学を経て、以前は当たり前であったはずの群衆の風景が「不思議な」ものとして受容される。ここでは、日本の群衆を自己とは別の存在として眼差す視点が描かれる。

「身なりは、三年まえよりも、はるかによくなり、若い人たちが多くて、健康そうな明るい顔をしていた。」

→朝鮮特需による好景気が、人々の生活にも影響していることを暗に示しているか。

「この人たちは朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさとどう係りあって来たのだろうか、と私は考え、釜山とパリを思い出した。彼らがいくさに反応し、または反応しなかった日本は、私の知らない日本であった。」

→好景気を楽しんでいる人々がその背景にある戦争とどのように対峙してきたか、考えを巡らせている。実際に見てきた釜山やパリの土地を想起しながら、加藤は眼前の日本の人々が時勢とは無縁のように過ごしていることに違和感を覚えているといえるか。

#### ○《朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさ》

→朝鮮戦争とインドシナ戦争を指す。

#### ○《朝鮮戦争》

・一九五〇年六月から五三年七月までの大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国との戦争。北朝鮮軍は朝鮮半島南端に迫ったが、アメリカが国連を動かして武力介入し、一九五〇年一〇月国連軍・韓国軍は鴨緑江岸に進出。北朝鮮軍は中華人民共和国義勇軍の援助で反撃、戦線は北緯三八度線付近に定着。五一年七月休戦会談が開始され、五三年七月休戦協定が成立した。朝鮮動乱。(引用：『日本国語大辞典』)

## ○《インドシナ戦争》

・一九四六年から七年間、フランスとベトナム民主共和国の間で戦われた戦争。一九五四年、フランス軍の拠点ディエンビエンフーの陥落によりジュネーブ休戦協定が成立。(引用：『日本国語大辞典』)

### 第六段落後半

詩仙堂の座敷は底冷えがして、鹿追いの竹筒の岩を叩く音が高く、鋭く、冴えていた。大徳寺の山門の屋根の反り、八坂神社境内の朝の霜柱、仁和寺の白い垣と夕陽……どこでも観光客には出会わなかった。六波羅蜜寺には、男女が集っていたが、それは信者たちで、見物人ではなかった。古都のすべては、きびしい冬の寒気と共に、静かに私の身体中に浸みとおった。それまでの私には、洛中洛外をひとり歩き廻った後に訪ねてゆくところがあり、温い茶を飲みながら、世間話にくつろぐことのできる場所があった。その日の経験のすべては、その町で生れて育ったひとりの女の、さりげない身振りや、眼ざしや、細い小さな身体のなかに、組みこまれ、統一され、焦点を結んだ。そのことを、私はひとりで仏像のまえにたっていたときにも、あらかじめ予感していたのだ。しかしそういう予感は、今や、なかった。私の京都のすべてを要約することのできる生きた人間は、もうどこにもいなかったし、私の京都そのものが、もはやかつての私の京都ではなかった。 何度通ったかわからぬ小径を辿り、何度踏んだかわからぬ飛石を伝いながら、私はいまだかつてみたこともない町をみた。懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけだ。そうしてある日、フィレンツェが私の眼のまえにあらわれたように、今また、京都が私の眼のまえにあらわれた。

## ○《詩仙堂》(京都市左京区)

【参考資料:京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951年11月】

詩仙堂は江戸時代初期の詩人石川丈山の隠棲した跡で、丈山が本邦三十六歌仙に擬して狩野探幽筆の支那三十六詩仙像を居堂の四壁に掲げたところから詩仙堂と名付けられた。丈山は三河の人で年少くて徳川家康に仕え、大阪夏の陣で先陣の功を争い抜駈したので家康の怒を買ひ、致仕して剃髪し、京都に上り悠々自適の生活を送った。

「鹿追いの竹筒の岩を叩く音」

→詩仙堂には、徳川家康の家臣・石川丈山が考案したとされる鹿威しがあり、おそらくこの音を指すと思われる。同時代においても、この音は、「それは正確にひとつの間隔を保って響いてくる竹と石とのふれ合う音だが、あの静かな音がこの白と緑で構成される立体的形象のなかに跳ねあがって、言葉ではつくしきれない雰囲気ができあがっているのをそこに感ずるだろう」(奈良本辰也『京都の庭』河合出新書、1955年10月)と評されているように、詩仙堂の名物であったことが類推される。

## ○《大徳寺》

【参考資料:『新旅行案内 12 京都とびわ湖』日本交通社、1955年2月】

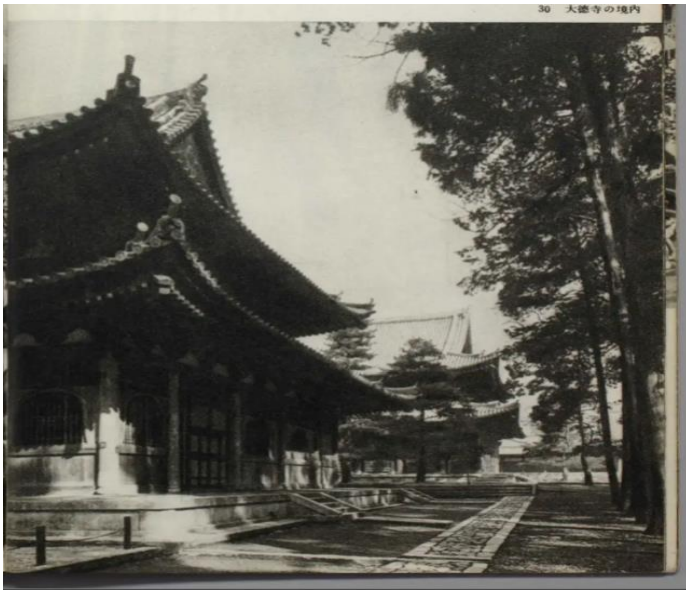
大徳寺は京都五山の上位にある。禅寺で有名な一休和尚や沢庵和尚の住んだ所としても知られている。伽藍はたびたび火災にかかったが、そのたびに再建され、現在の諸堂は文明年間に一休和尚によって復興

され、寛文年間に完成したものである。禅宗建築の最もよく完備した典型で洛北第一の大伽藍で、勅使門・山門・仏殿・法堂・庫裡などが一直線に建てられている。(中略)

〔山門〕

勅使門の奥にあり、重層で五間三戸、左右に三廊がついている。天正一七年(一五八九年)千利休が修築したもので、天井には長谷川等伯筆の画竜がある。上層にある千利休殿は利休が秀吉にきらわれて自決を命じられた原因になったものであるという。

写真の出典：北川桃雄『美しき古都・京都(少年美術文庫)』(美術出版社、1951年5月)



#### ○《八坂神社》(京都市東山区)

【参考資料：京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951年11月】

祭神は素戔鳴尊、稲田比売命、八柱御子命で創立に関しては説多く一定していない。一説によれば齋明天皇の2年高麗の調達副使伊利使主来朝に際し新羅牛頭山に奉祀された素戔鳴尊の神魂を山城八坂郷に祀り後社殿を建立して感神院と称したと言う。明治元年八坂神社と改称し大正4年官幣大社に昇格した。貞観18年(876)夏洛中に疫病流行の際祠官勅を奉じこれを神泉苑に送つたのが祇園会の始まりで、その後度々の疫病に靈験があつたので臨時祭も行われたが中絶し後再興した。再度の炎上の結果現在のものは明治34年大修理を加えたものである。社殿は徳川家綱の造営に係り単層入母屋造桧皮葺、祇園造と呼ばれ楼門は室町時代様式、石鳥居は明神鳥居高36尺石造最大のもので国宝である。拝殿束の燈竜は忠盛燈竜と呼ばれるものである。社宝中祇園社務家日記、祇園社絵図、木造狛犬、太刀4個を始め70余点は国宝となつている。末社の中蛭子神社は祇園造で国宝、蘇民将来社は疫除神として有名である。1月1日行われる白求祭は京の春の始まりであり7月の祇園祭山鉾巡行は夏祭りの華である。





出典：『現代人百科 No.16 京都・奈良 現代図絵』（日本織物出版社、1954 年 4 月）

### ○《仁和寺》（京都市右京区）

【参考資料：京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951 年 11 月】

真言宗御室派大本山で大内山と号し古くは「にわじ」と訓じ仁和寺門跡御室御所と称する。法皇門跡寺院中の首位で仁和年間（888）宇多天皇先帝の遺志をつぎ本寺を創建勅号を賜った。昌泰2年宇多法皇盆信に従い当寺に於て落飾され当寺の南に1室及び円堂を設けこれに遷られ法務の場所とされたのでこれを御室と称し、以来法親王相承け御室門跡の名が起つた。寺運も旺んで当時は方2里に及び堂塔僧坊屋根を連ね、塔頭子院60に及んだが応仁の乱に一山鳥有に帰し、寺運退転しわずかに仮堂に法燈を伝えていた。寛政徳川家光の寺領24万両をうけ中興なり、寛政皇居造営に際し紫宸殿、清涼殿を賜り堂宇を建立したが、明治20年災禍により3宇を残し、全滅したが漸次復興した堂宇中金堂は紫宸殿、御影堂は清涼殿を賜ったもので五重塔と共に国宝である。寺後に成就山88ヶ所があり参詣者が多く境内の桜は名勝に指定されている。又国宝である遼廓亭は江戸中期、飛瀑亭は江戸末期の茶席建築の粋を尽したものである。

### ○《六波羅蜜寺》

真言宗智山派。山号は普陀落山、院号は普門院。かつて当地に地藏菩薩の小堂宇があり、地名に因み六波羅蜜寺と称した、と伝える。天曆五年（九五―）近畿地方に悪疫が流行したとき、空也が自刻の十一面観世音菩薩に祈請し靈験があったので、これを安置して西光寺を建立し、応和三年（九六三）八月二十三日に落慶供養会を営んだ。第二世中信のとき、現寺名に復し、天台別院とした。源頼朝は当地に居館を構え、当寺を修理した。六波羅は鎌倉時代に幕府の六波羅探題の所在地として知られた。その後、足利義詮が貞治年間（一三六二―一六八）円海に命じて大修理を加え、真言宗とした。本堂は何度かの罹災後、貞治二年再建された。天正十九年（一五九―）豊臣秀吉は御供所として七十石の寺禄を与えた。末寺の十輪院・大慈院・行願寺などすべて廃寺になる。西国三十三番霊場第十七番札所としても知られる。運慶坐像・湛慶坐像、平清盛像と伝える僧形坐像、四天王像四体、地藏菩薩立像、康勝作の空也像、地藏菩薩坐像、閻魔王坐像、吉祥天立像の十二体は鎌倉時代の作で、いずれも重要文化財に指定されている。本堂は寄棟造、本瓦葺、室町時代初期の代表的建築で重要文化財。口から六体の小仏を吐き出している空也像は特に有名である。（引用：『国史大辞典』）



出典:『現代人百科 No.16 京都・奈良 現代図絵』(日本織物出版社、1954 年 4 月)

「古都のすべては、きびしい冬の寒気と共に、静かに私の身体中に浸みとおった。それまでの私には、洛中洛外をひとり歩き廻った後に訪ねてゆくところがあり、温い茶を飲みながら、世間話にくつろぐことのできる場所があった。その日の経験のすべては、その町で生れて育ったひとりの女の、さりげない身振りや、眼ざしや、細い小さな身体の中に、組みこまれ、統一され、焦点を結んだ。そのことを、私はひとりで仏像のまえにたっていたときにも、あらかじめ予感していたのだ。」

→これまでの「私」は、京都を巡ったあとに、その体験を集約し、感想を伝えることのできる他者—京都で育った「ひとりの女」がいた。

しかしそういう予感は、今や、なかった。私の京都のすべてを要約することのできる生きた人間は、もうどこにもいなかったし、私の京都そのものが、もはやかつての私の京都ではなかった。何度通ったかわからぬ小径を辿り、何度踏んだかわからぬ飛石を伝いながら、私はいまだかつてみたこともない町をみた。懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけだ。そうしてある日、フィレンツェが私の眼のまえにあらわれたように、今また、京都が私の眼のまえにあらわれた

→他者に体験を語る行為を通し、京都の体験が総括可能なものになるという予感は、二つの理由でかなわないものとなる。一つは、語る生きた相手がいないこと。二つは、眼前の京都は既知の京都ではなく、「私」にとって未知の京都になっていたらである。つまり、眼前の町は、すぐに総括可能なものではなくなっていたといえる。

「懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけだ。」

→京都はもはや、「私」と密に結び付いた土地としてではなく、異化されて、眼差しの対象として立ち現れる。  
→フランスへの留学、「彼女」との別れを通して変容した自己は、街をまなざす視点そのものを変容させていく。繰り返し「古い」と形容されることから、京都それ自体は、目まぐるしい時勢を経ても基本的には変わらぬ風景を有する土地として登場する。変容したのは自己や眼差しであることを強調するために、帰国後すぐの

日本体験の舞台として〈京都〉が選ばれたといえるのである。

《参考：加藤とフィレンツェ》

【参考資料：加藤周一「イタリアの印象」（初出：『西日本新聞』1952年10月23日—25日号、引用：『加藤周一著作集10 ある旅行者の思想』平凡社、1992年9月）

フィレンツェではすべてが美しい、糸杉も、トスカナの平野も、アルノーの流れも、僧院も、壁画も、宮殿も。そしてその美しさを感じる時、われわれは西ヨーロッパの文化の泉の一つを感じているのだ。感じるごとと、理解することとはどれだけちがうか、知識を本から汲みとることと、実際に一枚の絵を眺め、古い街の夕暮の匂いを吸いこむこととはどれだけちがうか。けれどイタリア文化の一面もまた、キャンティのごときものである。酒の味は講釈ではわからない。飲み、かつ酔い、髪黒く色白き女の頬のばら色に染るのを眺め、その抑揚の強い言葉のにわかに甘くひびく時を知らなければならない。

→フィレンツェと、フランス留学後の加藤にとっての京都の街との共通性とは何か。それは、街で感じるあらゆるものが、自身の生きる日常生活・実生活と密着したものとして自然に流されるものではなく、〈文化〉という概念を理解し、感じるための媒体として現前化しているという点である。ゆえに、留学後の加藤における、京都という街への見方は「一つの文化とその形式」として表現されていると考えられる。